梅白し

松岡隆子

梶の木も榛も傾ぎて水の春

まんさくを見にゆくときの手ぶらかな

芽あぢさゐもの言ふやうに解れそむ

はくれんの咲きだすころの風の空

梅白し石のベンチに石の冷

梅白し白しとあそぶ風生忌

けふ何故か紅椿より白椿

白椿こころ傷つき易き日の

落つるならわが手に落ちよ白椿

義弟逝く

こころざし高きに生きて梅真白

叔母逝く

梅寒し母とも思ふ人の亡く

思ひまた辛夷の花をとほく見て

以前青山丈さんが拙句集『青木の実』の〈日の差して椿の数のにはかなる〉について、先ず「日の差して」から椿の樹の大きさが見える、と言い、「数のにはかなる」となれば白椿でなくてはならなくなる、と評された。確かに白椿の方が鑑賞に堪えると納得したが、実際は赤い椿だった。当時の私は椿といえば赤い椿で白椿は目に入っていなかった。ところがこのところ急に白椿が気になり始めた。気が付けば白椿の前に立っている。ある時傷一つない白椿の落花を見つけ、思わず拾って句会の席に置いた。暫くすると花弁がはらりと解け崩れてしまった。あのまま樹下の日陰においておけばよかったと悔やまれた。